

ては知らざりしと見えて、貝原が日本歳時記に、香物の製しやう多く載たれども、みな今の法にあらず、十月條に、蘿蔔本千細糍石一麴三鹽五とあり、これにては大根百本、糍一斗、麴三升、鹽二升五合なり、かくては久しく貯へがたし、其うえ重しをおく事もいはず、又法大なる蘿蔔本千鹽三入おしをかけ置て、なれたる時用、是より鹽多ければあし、糍麴なども入べからず、是又今の淺づけとも異なり、又法、蘿蔔をよく洗ひ三日ほどほし、毎夜席をおほひ、葉に少し赤み出て後さつと洗ひ、水氣なき時に漬る、大根一遍ならべ、鹽を大根の少し見ゆる程にふり、其上に麴をふり、段々につけおしをかけ置べし、又右の如くつけて後、酒粕、米糍、鹽をつき雜、右の大根を水にて洗ひ乾たる時つける、尤よしといへり、其頃大かたこれらの法を用ひしなるべし、

〔續近世畸人傳五〕大橋東堤 永田觀鷲〇中

觀鷲永田氏、名忠原、字俊平、一號東臯、又黎祁道人といふは、豆腐を嗜むこと甚しければ也、黎祁は豆腐の異稱なり又一奇僻は、糠漬の菜俗に香物を惡むことと蠱毒のごとし、吾儕席を同じうする時も、これを喰ふことを憚る、甚香を忌が故なり、或尊貴へ參りし時、御戲に試んとおぼして、此物を幾重もつつみて、御手づから下し賜せしを、とりもあへず、顔眞青になり、物おぼえずなげすて、走れり、其公もあまりにて、よしなきことせしと悔させ給ひしと也、

〔南嶺子二〕藪に香物といふ事は、〇中予〇多田尾張に在し時、名古屋より津島へ往とて、海東郡を通りしに、阿波手森といふ處に、藪の中に壺をふせて、往來の瓜茄鹽かきんの賈人、そのわが賣ル物を納置、香物自然と熟て、瓜茄子に蓼穂を少加へて、毎年極月廿五日、熱田社の煤拂と、二月初午の日の神供に獻す、兩所より獻じて、其數も委く記置たれ共、無用の事なれば略しぬ、

〔矢立墨〕粟殿あはだの森の香の物、熱田へ獻する道すがらのさまを一見し、度思ひしに、是は夜深く出たち、未明に熱田へ到著し、社家へ渡す由を聞及びしが、文化十四年丑二月四日、いかなるゆへ有て